

第八問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① 夏休みに入って半分ほど日が過ぎた頃。

ある朝のことだった。近所の酒屋の主婦が電話の呼び出しがかかったことを知らせにきた。祖母は電話を受けに行ったが、もどつてくると朝食をとっていたわたし達に、急いですませるようにサイソクした。そして、今日一日どこかへ遊びに行くように言うのだった。誰かお客が家にやつてくる気配だったが祖母の表情のこわばりから察して、どうもわたし達に会わせたくない人間のような感じがした。

「夕方まで、ゆつくり遊んできなさい」

わたし達は顔をみあわせた。子供同士で映画館に行くことは禁じられている。

「U山に登ろうか」わたしが思いつき弟が同意した。祖母はそれを聞くと弁当をつくり水筒を用意した。頂上には駅の売店と展望台があるだけなのだ。

朝の八時頃、弁当を持って姉弟で家を出された。

「小遣いはみんな使ってええんやけ、なんべんでもケーブルカーに乗って遊ぶとええよ」

早く帰るなど祖母に念を押されて、わたし達は家を出た。

② ケーブル駅に着くと九時の始発にはまだすこし時間があつた。

始発の乗客はわたし達のほかに、若い男女がひと組いただけである。ケーブルカーの開通直後は日曜ごとに溢れるほどの乗客を運んだけれど、この日はひっそりとしたものだった。

た。夏のシーズンにはまだよほど早いのだ。

屋根の深いホームに入ると、周囲の樹木の反映であたりは水底みたいに青く沈んでいる。山風が林を通り抜けて流れる。

ふた組の乗客を乗せてケーブルカーは発車した。ブザーが構内に鳴り響いた。すると風に乗って上の駅からもブザーの響きが聞えてきた。山頂駅のホームでも下り始発のケーブルカーがすべり出てくるところだった。山の上と下とでむき合つて、いまから会おうとする男と女のようなのである。わたしと弟は黙つて窓越しにそのきれいな光景をみた。

わたしは車中でいま頃じぶん達の家にきているだろうみたことのない客のことを考えた。祖母のフシンなあわてぶりから推して、その客とはもしかするとわたし達の父ではないかと思うのだ。年に一度か二度、祖母はある日突然わたし達を家から追い出した。

「どこまでも悪いやつですよ」と祖母が祖父に話している。

「あげな男を、しんからの悪人ちいうとですよ」

しんからの悪人というのはどんな人間か知らないが、この男がわたし達のどちらかを欲しがっているのだらう。彼はわたしと弟のどちらを欲しているか。

A シニルシニルとワイヤーのこすれる重い音と車輪を噛むレールの響きがつづく。ケーブルカーは、のろのろのろのろと登っていた。うしろをふりかえると、町がずいぶん下のほうに遠ざかっている。

悪い男は下界である。いまのところは弟もわたしも安全圏のうちだ。なにしろこれから

〔出典〕

むらたきよこ
木田喜代子

『鋼索電車』

〔著者出題歴〕

- ・千葉大学
- ・大阪大学
- ・広島大学
- ・琉球大学
- ・明治学院大学
- ・帝京大学
- ・愛知大学
- ・立命館大学
- ・龍谷大学

甲

甲

ケーブルカーは、そのときわたしの目の前で一匹のなにかしら悲しみに満ちた生きものになって、震える胸を押さえたわたしをじっとみつめているようだった。わたしは電車の発散する不安の磁波みたいなものを全身に浴びて、ホームに突っ立っていた。

(注) ○電話の呼び出し……電話のない者が、電話のある者に取次を依頼し、その呼出しによって通話

65

「これは、ぼくのぶん」と、草の上に置いた。
弁当をすませると、わたし達は草の上に寝た。明るい空の色がとじた臉のうらに映った。鳥の声や蟬の音が耳に流れこんだが、それはわたしに眠たいような、うつとりした気分をもよおさせた。わたし達はすこしのあいだほんとうに午睡した。
夢の中に、山の下のじぶんの家の玄関がみえた。わたしが戸のすきまからのぞくと男物の黒い大きな革靴が一足脱いであった。わたしはどきどきしながらなおもよく中をのぞこうとした。そのとき目が覚めた。

60

③ 山頂の展望台に行くと、人影はなくて広い。カタンにいちめんのダリアの花が風に震えている。わたしは高いところが苦手なので、てっぺんのかぎられた面積を歩いていると空に踏み外しそうになる足の感じをおそれた。
「みて、みて」と崖のところで弟が両手をひろげて呼んだ。「姉さん、みてごらん」
彼はひろげた両手を水平に、はばたくまねをして、「ぼく、鳥になろうか」
わたしはずうとうしろのほうから、声ばかり大きくして叱りつけた。
昼近くなる頃にはそれでも山頂は登山者でだいにぎやかになった。展望台の裏のひとけのない草地に腰を下ろして、わたし達は弁当をひらいた。
おかずは煮しめである。急いでいたので朝ごはんの副菜をそのまま詰めたのだろう。そして祖母はかんじんの箸を入れ忘れていたのだった。
「どうする」わたしは弟をみた。
「ぼく、箸つくつてみようか」彼はズボンのポケットから小刀をだしてみせた。
それでわたし達は、山頂の裏手の林へ行つた。彼は一本の柿の木をみつけると幹を登つた。片腕を幹にまわし、もう片腕をのぼして適当な枝を折つた。
弟は器用な手つきで枝を削つた。ていねいにていねいにそいだ二本を、
「はい、姉さんのぶん」とわたしにくれた。それからまたそろそろと慎重にそいで、

50

45

40

35

乙

78

「あんな男を、根っからの悪人というのですよ」の意。

傍線部 a ～ d のカタカナを漢字に改めよ。

波線部 A ～ D のうち擬態語でないものを一つ選べ。

傍線部1「今日どこかへ遊びに行くように言うのだった」とあるが、**祖母**がこのよう
 言う理由を、**わたし**はどのように**推測**しているか。**四十字**以内で説明せよ。

傍線部②「わたしはずうつとうしろのほうから、声ばかり大きくして叱りつけた。」とある
 ここでの「わたし」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

今後のことに絶望して無分別にふるまう弟を必死になって止めようとしている。危険な場所ではしゃぐ弟を、近づくことができないままいさめようとしている。

危ない場所です。悪ふざけする弟を、動くのが億劫なので声だけで戒めようとしている。自暴自棄となって大胆な行動に出た弟の昂奮を、慎重になだめようとしている。山頂に到着した昂奮を押さえられない無邪気な弟を、何とかなだめようとしている。

空欄 甲 に入れるのに適当な語句を、次の中から一つ選べ。

この不安な電車の形こそほんとうはじぶん達の身の上のこと

この無人の電車こそ一人で生きて行かなくてはならないわたしの姿そのもの

このひっそりとした電車こそこれからの平穏を予見させるもの

このひしゃげた電車こそ虐げられ続けたじぶん達の姿そのものの

この薄暗いホームこそ光明のない世界の象徴

本文についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

下界で待ち受ける暗い現実への不安と、さびれた山頂の観光地での姉弟の幸福なひとときとが、夏の終わりの情感とともにしみじみと描かれている。

鋼索電車の不気味な存在感を際立たせるような描写を通じて、姉弟のぎくしゃくした関

係や下界で待ち受ける過酷な現実が印象づけられている。

強い絆で結ばれた二台のケープルカーのように、姉弟の強い結びつきを実感した夏休みの幸福な一日の思い出が、印象深く描き出されている。

擬人的表現や象徴的表現を駆使して、仲のよい姉弟をとりまく下界での不埒に満ちた現実と、山の上での幸福なひとときとが、対照的に描かれている。